

微笑みの国で知った、水の二つの顔

奈良県立国際中学校二年

安部 湊人

朝、何気なく蛇口をひねると無色透明な水が流れ出す。私達はその一滴に一体どれだけ価値があるか、一度でも考えたことがあるだろうか。日本という極めて恵まれた環境において、水は空気と同じく「あつて当然」なものだと等閑視されがちだ。しかし、数年前に訪れた「微笑みの国」タイでの経験は、私達日本人が如何に水という資源に恵まれているか気付くことができ、以前の「水」という概念を壊すものだった。そこには、命を繋ぐ、「慈愛」の顔と、全てを飲み込んでいく「狂気」の顔という二つの水の真の姿が混在していた。

最初の衝撃はバンコクの喧騒から離れた観光地でのことだった。肌にまとわりつくような重く湿り気を帯びた熱気に耐えかねて商店の飲料棚に手を伸ばそうとした時のことだ。陳列されたマンゴージュースやコーラの横の何の

変哲もない一本のミネラルウォーターに付けられた値段を凝視した。水の方が、甘い果汁や加工された炭酸飲料よりも数バーツ高価なのである。

日本の感覚だと、水は飲料の中で最も安価な部類で、公共の場では無償で提供されることだつて珍しくないほどだ。しかし、その棚が突きつけてきた現実私の意識を覆した。インフラとしての水が飲用に適さないこの地において、厳格な衛生管理を経てボトリングされた「安全な水」は嗜好品を超えた「命の保証」そのものだつたのだ。

一本のペットボトルの水を飲むだけで、私は「安全を買い求める」という行動にある種の緊張を覚えた。私達が無造作に流している一滴は、「枢要性」を持つ宝物だつた。その重みを知った時、自国が如何に特別な環境で危うい程の幸運の上に成り立っているかを痛感せずにはいられなかつた。

しかし、水が持つもう一つの顔を知るのに時

間はかからなかった。同じ旅の最中、私は東南アジア特有の劇烈な気象現象、スコールに見舞われた。

それまで眩しいほどに晴れていた空が、瞬間に墨を流したように灰色に染まると、トタン屋根を激しく叩く雨音が辺りを支配した。それはもはや音というよりは、断続的な銃声に近く、視界が数メートル先も見えないくらいだった。水の塊が地上に叩きつけられた。

わずか数十分の間に、平穏だった陽だまりの道路は茶褐色の濁流へと姿を変えた。濁流は歩道にも溢れ、街の機能を麻痺させていった。私はそれを見て強い戦慄を覚えた。一滴を惜しむほどの水が、「慈愛」を忘れ牙を剥き全てを飲み込む「破壊者」となっていた。

水は人間が制御できるほど柔かな存在ではなく、地形を削り文明を飲み込む暴力的なまでの自然のエネルギーそのものだ。飲料として人の命を繋ぐ恩恵と、災害を引き起こす脅威。この極端な二面性こそが本質であり、人間は常にそ

の深淵な力の均衡の上で生かされているという事実を思い知らされた。

地球上の水のうち、人間が実際に使うことのできる淡水は全体のわずか〇・〇一パーセントにも満たない。この極めて限られた資源を私達は世界の人々と、未来の人々と分かち合っている。タイで私が経験した「高価な水」と「スコール」は水の大循環の異なる側面を提示してくれただけに過ぎない。

水は、私の、私達の命を育む母体であると同時に、永久に畏怖の念を払わなければならない大自然の権化でもある。この「二つの顔」を持つ水の惑星に生きる者として、安全な水が容易に手に入るという奇跡に甘えず、一滴の重みを噛み締めながら生きていきたい。最も身近な水。その蛇口から流れる一滴さえも大切に守ること。それは、自分自身の命を、そしてこの地球の未来を慈しむという人間に課せられた最も根源的な責務なのだから。